大腸内視鏡を行い，休憩後注腸検査を行う方法とした．以後大腸検査症例が急増し，小病変例も数多く発見されている．大腸内視鏡検査件数でみると，60年には年間31例であったが，元年には年間543例，2年には903例と急増している．これらについて病理所見の検討を加えて報告するとともに，同時期に経験した小病変例として，de novo 癌と考えられたS状結腸早期癌の1例と，粘膜下腫瘍像を呈した直腸カルチノイドの1例を呈示する．

34．当院における食道静脈瘤硬化療法

（大宮中央総合病院）
椿　哲朗・神戸　知充・宮之原貴徳

1989年7月から1年7カ月間に，食道静脈瘤に対して10例(緊急止血5例，待期3例，予防2例)，14シリーズ合計31回の硬化療法を行った．基礎疾患は全例肝硬変で，初回治療時の内視鏡所見は，殆どがF2からF3であった．硬化療法は1週間毎に1シリーズあたり1～4回行っている．内視鏡先端にバルーンを装着し，硬化剤1％aethoxysklerolを静脈内に3～5ml，抜針前にヒトトロンビン（300iu/ml）を1ml注入している．2回目以降は“地固め法”による潰瘍形成を目的に，硬化剤1～1.5mlの血管外注入も併せて行っている．重症例以外は，3～4カ月間隔の追跡を行い，F1Rc(＋)以上の再発例には追加治療を行った．合併症は一過性の発熱，胸痛が多く，静脈瘤完全消失例の2例に食道狭窄を認め，1例に食道ブジーを行っている．再出血例は1例もなく，肝機能に関わらず安全に行える治療法であり，今後は予防的硬化療法にも力を入れていきたいと考えている．

35．残胃癌，若年者胃癌

（新宿NSピルクリニック）
福島　通夫・伴野　正枝

残胃癌および30歳未満の若年者胃癌各々2例につき報告する．手術不能の1例を除き，全例第二外科で手術をうけ経過良好である．

残胃癌第1例はリューマチ痛風センターから紹介された70歳の男性で昭和29年胃潰瘍で胃切．第2例は新宿区の胃癌検診で来院した59歳の男性で昭和40年胃潰瘍で胃切．いずれもビルロートII法で相当の進行癌の状態であった．

若年者胃癌の第1例は19歳の男性で榊原グループの定期検診者よりドック検査を依頼されたもの．スキルスによる癌性腹膜炎の状態で非手術のまま間もなく死亡．第2例は榊原記念病院医師の親せきで他病院で発見された噴門部のIIC＋IIaで噴門切除空腸間置術をうけた．夫々に若干の文献的考察を加える．

36．OK-432とfibrinogen腫瘍内局所投与による局所免疫反応と遠隔転移抑制効果について―マウスを用いた実験的研究―

今井　俊一

免疫賦活剤OK-432はfibrinogenと混合し，腫瘍内に局所投与されることにより有効な遅延型過敏性反応を惹起し，優れた抗腫瘍効果をもたらすという．現在我々は，この投与方法が，腫瘍の遠隔転移に対する抑制効果および宿主の生存率を向上させるか否かについて実験動物を用いた検討を行っている．現在までに得られた実験結果とOK-432とfibrinogen腫瘍内投与に関する若干の文献的考察を行なう．

37．FOY分解産物ε-グアニジノカプロン酸の細胞性免疫に及ぼす影響

堀江　良彰

目的：蛋白分解酵素阻害剤メシル酸ガベキサート（FOY）の分解産物として，ε-グアニジノカプロン酸（GCA）があることが報告されている一方，FOYの抗腫瘍効果を示唆する報告がある．そこで我々はGCAのNK活性に及ぼす影響について研究している．

方法：単核細胞を正常人および担癌患者（胃癌および大腸癌の術前患者または再発患者）の末梢血より比重遠心法によって分離し，GCAとpreincubateし，K562を標的として標準クロム放出試験によりNK活性を測定する．

結果と考察：現在まで行なわれたin vitroの実験では，24時間preincubationで，正常人および担癌患者で0.5～1mMをピークとしてNK活性増強作用が認められている．今後担癌患者における新しい治療薬としての道が開けるかも知れない．

38．担癌患者におけるNK活性抑制の機序についての研究

冨松　裕明

前回の例会で，自己腫瘍に対する細胞障害性Tリンパ球の誘導は必ずしも容易とは言えないと報告した．その誘導を困難にしている原因の一つとして癌患者の免疫能の低下が考えられている．

そこで今回担癌患者の免疫能低下を解析すべく，免疫応答の一つであるNK活性の担癌状態での変化について検討した．

はじめに胃癌，大腸癌，乳癌患者のNK活性を検討，controlの良性疾患患者および健常人に対し，癌患者